橘　正一

「枕草紙」あはれなるものの條に「九月晦日、十月一日のほどに、只あるか無きかに聞きつけたるきりぎりすの聲」とある。これによれば、平安朝中期の京都のキリギリスは、舊暦の九月下旬・十月上旬の頃まで鳴くものである事がわかる。舊暦の十月上旬といへば、立冬の頃で、暖い京都でも、もう、霜が降りる。昔のキリギリスは、その頃まで鳴いてゐたのである。さればこそ、「新古今集」の歌人をして、「きりぎりす、鳴くや霜夜のさむしろに、衣かたしき、獨かも寢む」の嘆きを起させた。このサムシロが寢具のムシロに、「寒し」を掛けたものである事は言ふまでもない。キリギリスといへば、霜夜の寒さを聯想させるのだから、昔の京都のキリギリスが、今日の標準語のキリギリスと、違つたものである事は明かである。では、昔のキリギリスは今の何に當るだらうか。「コホロギ」と、「大言海」の著者は答へる。私も、この答に賛成するものである。

コホロギは九月下旬になつて現れる。初は野にあり、寒さに向ふに從ひ、段々、人家に近づく。だから、詩にも、「七月野に在り、八月宇に在り、九月戸に在り、十月蟋蟀我が牀下に入る」とある。衣かた敷き獨り寢る霜夜の寒さをかこつ頃となれば、床の邊、枕の下にまで這入つて來て、ひとしほ、物のあはれを備す仲立ともならう。

コホロギをキリギリスといふ所は、地方には、今も、多い。私の調べた所では、岩手・秋田・山形・埼玉・山梨・三重の六縣には、昭和の今日、なほ、行はれてゐる。昔は、もつと、廣かつた。「物類稱呼」によれば、武藏府中邊、信濃・奈良、「本草綱目啓蒙」によれば伯耆を、之に加へる事ができる。これらの地方は、今日は、もう、改まつ

たらしい。これから考へると「物類稱呼」以前は、一層、分布が廣かつた事だらう。とにかく、地を隔てて、十箇所にも行はれて居れば、これを以て、偶然の一致、個別的の誤解と片附けてしまふわけには行かない。必ず、共同の源が有つたに違ひない。その共同の源は、奥羽や伯耆であるはずはなく、必ず、京都でなければならない。京都のキリギリスは古と今とで違つてゐる事が、幸、判つてゐるから、我々は、方言を以て、京都の古を傳へたものであると解する事ができる。

「古今集」の俳諧の歌に「秋風に綻びぬらん、籐袴、つゞりさせてふきりぎりす鳴く」といふのがある。「袖中抄」によれば、キリギリスは「つゞりさせ、かがは拾はん」と鳴くといふ。所が、今日、ツヅリサセと鳴くといふ蟲はコホロギである。この鳴聲が、そのまま、蟲の名となつて、コホロギの事を、越後高田でツヅリサセ、越中でツヅレサシ、飛驒でツヅリサッといふ。埼玉縣幸手町では、コホロギは「寒さが來るから、肩取つて、裾つげ、裾とつて、肩つげ」と鳴くといひ（幸手童謡集）、栃木縣芳賀郡では、「こほろぎ　ころころ、寒さが來るから、肩とつて、裾させ、裾とつて、肩させ」と鳴くといふ（芳賀郡童謡集）。飛驒の高山町では「つうつう、つんづりさせ」と鳴くらしい（飛驒の傳説と民謡）。長野縣小縣郡のコホロギは「かんた　きよろきよろ。つゞれさせ」と鳴く（小縣郡民謡集）。盛岡では「肩させ、裾させ」である。これが名詞となつて、コホロギをカタサセといふ（本草啓蒙）。

とにかく、古書のキリギリスが今のコホロギである事は、種々の點から見て、動かないと思ふ。早く、白石もさう言つてゐるし、それに反對した人も無い樣である。然るに、古書のコホロギの方は、今の何に當るか、よく判らない。これは、一つには、コホロギの方は、キリギリスほど、古書に現れてゐないからである。「枕草紙」にも、「蟲はすゞむし、松むし、はたおり、きりぎりす」とあつて、こほろぎは無い。和名抄には、蟋蟀を岐利々々須、蜻蛚を古保呂岐、促織を波太於利米と訓じてゐるが、狩谷望之によれば、以上の三語とも、支那では、同意語なさうである。だから、漢字を手がかりとして、その正

體をつかむといふ見込も薄い。

方言はどうかと見ると、盛岡市・仙臺市・山形縣庄内などで、コホロギといふのは、東京のキリギリスの事である。「言海」の著者が、古書のコホロギを、今の東京のキリギリスに當てたのは、この東北方言が根據になつてゐるだらうと推量する。といふわけは、大槻さんは、一の關藩(陸仙臺領、今岩手縣)の人だからである。奥羽地方には、京都の古語の殘存するものが多いから、これは、確に、有力な説である。

× × × ×

然るに、一方、新井白石は、古書のコホロギは今のイトドであると言つてゐる。白石によれば、かうなる。

古稱	今稱
きりぎりす	こほろぎ
こほろぎ	いとど
はたおりめ	きりぎりす

白石の言ふイトドはオカマコホロギ(漢名蟋蟀)の事だらう。今の京都市では、コホロギをイトドといふが、それは近世に於ける變化だらう。

古名イトド、標準和名オカマコホロギ、漢名蟋蟀、學名 Diestrammena apicalis は、黄褐色、無翅(小野蒙山の雄は翅ありは誤)。體の背面は弯狀に曲り、頭部は前胸下に隱れ、觸角は褐色にして、甚だ長く、後脚よく發達して、跳ぶに適す。體長七分許、觸角三寸以上。畏は陰地・床下に隱れ、夜は臺所・竈の邊に現れ、米麥の殘飯を食ふ。雄は、リーリーと、かすかに鳴く。

これの方言は、「物類稱呼」に七、「本草綱目啓蒙」に二十七、佐藤清明さんの「全國蟋蟀方言集」(土の香掲載)に、直接採集のもの三十ばかり擧げてある。陶山によれば、越前・伊豫でコホロギ、加賀でセンチコホロギ、ハダカコホロギ、武藏で、オカマコホロギ、エビコホロギ、シツコホロギ、シツチコホロギといふさうだから、これを古書のコホロギに擬するのも、亦確に、有力な説である。

この蟲は、竈の邊によく現れるので、カマの附く名が多い。オカマギース(備前)、オカマキリゴ(備前)、オカマギリス(尾張)、オカマゴ(河内・濃飛・伊豫)、オカマコ

ホロギ(武藏)、オカマサマ(磐城)、カマウサギ(土佐)、カマギリス(尾張)、カマゴ(伊勢・伯耆・四國)、カマコ(安藝)、カマドウマ(石見・四國)、カマドムシ(土佐)、カマボコ(三河)などそれである。支那で、竈馬・竈鷄といふのも、命名の趣意は同じである。跳ねる所から、馬に譬へた名も多い。ウマ(備前)、ウマギース(備前)、ウマギス(播磨)、ウマサイムシ(備前)、エベスウマ(紀伊)、カマドウマ(石見・四國)、トビンマ(隱岐)などがそれである。同じ理由から、兎に譬へた名もある。ウサギムシ(四國)、カマウサギ(土佐)など。又、背中が猫の樣に丸い所から、ネコセナカ(陸前)、ネコトチ(丹波)の名もある。體の割合に、鬚が馬鹿に長いので、大黑ノヒゲ(用事)といふ所もある。翅か無い所に着眼したハダカコホロギ(加賀)といふ名もある。

ゴキ(椀)に殘つた殘飯を食ひに來るから、ゴキムシ(備中)の名もある。ヨマシクヒ(和泉)は、笑まし麥を食ひに來るからであり、イイゴ(長門・九州)、イゴ(筑前)、イイギリ(備前)、イイギリゴ(備前)は、イヒ(飯)を食ひに來るからだらう。イトドもイヒトドで、飯(イヒ)を食ふトドの意だらうと思ふ。トドは、ネコトチのトチ、クロトチのトチ、クロトトのトトと同じものだらう。遠江で、コホロギを、トンド、ヒゴウトンド、シュウトンドといふ、そのトンドも同じ名である。

古い俳諧に詠まれたイトドは、オカマコホロギの事であると解してよい。少なくとも、次の二つはさうである。

いとど鳴く猫の寢にねむるかな　鬼貫

海士の屋は小海老にまじるいとゞ哉　芭蕉

俳諧の季寄を見ても、イトドは、形蝦の如く、多く、寢のあたりに穴居すとあつて、鬼貫や芭蕉が、之を寢や海老に取合せて詠んだのは尤の事である。然るに、岩本・宮澤兩氏の「新撰俳諧辭典」を見ると、イトドをコホロギの一名とし、しかも、芭蕉の句を、例として引いてゐる。しかし、コホロギとしたのでは、芭蕉の句は解けない。俳諧の專門辭典がこんな事では、心細い限りである。「大日本國語辭典」には、イトドを「コホロギ(蟋蟀)をいふ。京都の方言」と「嬉遊笑覽」によつて、書いてゐる。

近頃の京都の方言としては、無論、これで良い。ただ、古語のイトドを擧げないのは手落ちである。「大言海」には、イトドをコホロギの異名としてある。これも、京都の現代方言のつもりなら、それでいゝが、そんなら、京都方言ととわるべきであつた。しかし、大槻さんの考では、このイトドは京都方言のつもりではないらしい。そんならば、「コホロギの異名」といふ解釋は誤つてゐる。殊に、「和漢三才圖會」を引用したのは、明に、矛盾である。「和漢三才圖會」には、かうある。

「籠馬、籠鷄、吉云、伊止比、今云、伊止之、本綱、其狀如促織稍大、脚長。好穴籠旁。俗言籠有籠馬足食之兆也。

△按、籠鷄似促織而小。色赤淡。身圓而足長。秋夜鳴聲似蚯蚓而細小、最寂寥。

カマドの傍に穴すとあるから、これは、明に、オカマコホロギの事である。それを、京都で、昔はイトドといひ、今(正德年間)はイトジといふとの趣旨である。もし、之をコホロギの意味に解するならば、「コホロギはコホロギに似て小なり」といふ事になつて、變なものである。京都の昔のイトドはオカマコホロギの事である。京都の今のイトドはコホロギの事である。古今に於けるこの變遷に氣が附かない所から、色々の誤解は生ずる。

元祿時代の「雪言字考」に、籠馬をイトドと振假名したのはいゝが、カの部に、同じ字をカウロギと振假名したのは誤である。その註に「狀如促織稍大、脚長。好穴籠旁」といふ「西陽雜俎」の文を引いてゐるが、これは「本草綱目啓蒙」の文と同じもので、オカマコホロギの說明である。なぜ、かういふ明白な誤を犯したのか不思議にたへない。

× × × ×

イトドの考證は以上で終つた。これから、キリギリスの方言の分布を調べてみよう。

キリギリスの方言の內、一番多いのはギスの系統である。青森・山形・神奈川・長野・富山・福井・靜岡・愛知・京都・大阪・兵庫・島根・岡山・愛媛の二府十二縣に分布してゐる。ギッチ系もギス系の內に含ませれば、なほ、茨城・

埼玉・山梨・福岡の四縣を加へる事ができる。德島縣美馬郡のギーッチョはバッタの事だと報告されてゐる。岡山縣成羽村のギースはコホロギの事だと報告されてゐる。

ギス系に次いで多いのはキリスである。これは、福島・神奈川・京都・奈良・高知の一府四縣に分布してゐる。富山縣のゲレスもキリス系の一つに數へれば、なほ一縣を增す事ができる。ギースといひ、キリスといひ、キリギリスといひ、いづれも、鳴き聲から來たらしく思はれる。

ギス系・キリス系に次いで多いのはコウロギ系である。これは、奧羽四縣に亘つてゐる。これに次いで多いのは、島根・岡山・愛媛に行はれるチィンギイスである。能登のトンギリスも、この一變化に數へていい。

以上、ギス・キリス・コホロギ・チィンギイスの四系統を除けば、あとは、いづれも、一二縣に又は行はれる微力なものばかりである。一村一郡にだけ、孤立して行はれるものは、その地方の人の創作と考へていい。從つて、京都の古書から、出典を見つけようなどは愚な努力である。これに反して、遠く地を隔てゝ、數縣、乃至、十數縣に散布してゐるものは、必ず、有力な貯水池が、文化の中心地にあつて、その共同の源から、四方に流れ出したと考へていい。だから、その源を京都の古書から發掘しようとする努力は有意義である。たとへ、その努力が失敗に終つたとしても、なほ、我々は、それが京都の古語であつたといふ假說を棄てるには及ばない。なぜといつて、古書に洩れた古語もあり得るからである。

ギスは、明に、京都の言葉である。俳人は之を晩夏に入れ、又は、秋の季に入れてゐた。「ぎすの聲、引いる計りねむき哉」（風鳴）——これは「眠き哉」とあるから、晩夏のつもりで詠んだのだらう。風鳴は尾張の人、京の二條家の俳諧となり、文化七年に歿した。

ギスは俳諧にも詠み込まれたが、キリスの方は古書に見當らないのは殘念である。しかし、現在も、山城久世郡などでは、ギスとも、キリスとも言つてゐるから、もと、京都市内にも行はれたに違ひない。ただ、この方は、キリギリスの訛語と認められて、筆に記される機會が無かつたまでだらう。正語と訛語とが並び行はれる場合に

は、筆に記されるのは、必ず、正語の方である。だから、訛語は、偶然の機會でもない限り、文獻に殘る事は、まづ、無い。方言學は、その訛語を、主に取扱ふものである。だから、方言學は、文獻の足りない所を補ふものである。

× × × ×

今度は、コホロギの方言を調べてみる。ここでは、一番勢力のある方言はキリギリスである。百五十年前までは、十縣に亘つて行はれた。今は六縣である。これに次いで多いのは、イトド系・キリゴ系・クロトチ系・コロコロ系・チンチロ系などである。いづれも、三四縣に分布してゐる。以上を除く外は、二三縣にのみ行はれる微力のものばかりである。イトドやクロトチは京都の言葉・チンチロリンは大阪の言葉である。これらは、京阪語の權威を以て、四方に擴んだから、これだけの分布を見る事になつたのである。

最初から今までの所を要約すれば、次の様になる。

(一)古語のキリギリスは、今の標準語のコホロギである。今も、方言には、コホロギをキリギリスといふ所が多い。

(二)古語のコホロギは、今の標準語のキリギリスであるらしい。今も、方言には、キリギリスをコホロギといふ所が有る。しかし、これには、古語のコホロギは今のオカマコホロギであると言ふ說もある。

(三)古語のイトドは、今の標準語のオカマコホロギである。

(四)京都の現代方言のイトドはコホロギである。

最後に資料を列記する順序であるが、方言集にある蟋蟀の字をコホロギとよむべきか、キリギリスとよむべきかに迷つた。この字は、天治字鏡にも、和名抄にも、易林本節用集にも雜言字考にも、キリギリスと訓じてあるが、近頃の辭書には、コホロギと訓じてある。いつ、いかなる理由で、かう訓みかへたのか知らないが、同じ字を、兩樣によむとは紛らはしい。かういふ紛らはしい字

は、漢字節減とは少し違つた意味に於て、避ける樣にしたいものである。動植物學の方では、和名は、すべて、假名で書く事になつてゐる。それはさて措き、今は、蛾蜂と漢字で書いてあるものは分離して、別に、まとめる事にした。

資　料

ケは縣、グは郡、マは町、ムは村

コホロギの方言

1 アブラギス　信州下水内グ
2 イゴ　肥前千千石マ
3 イチズ　種子島（農民古語）
4 イヂ）　さつま山川マ兒ケ水
5 イチュ）　さつま山川マ福元
6 イヅ）　さつま山川マ大山
7 イヅ）　さつま排宿グ今和泉
8 イトウシ　尾州（本草啓蒙）
9 いとじ　「浪花聞書」
　　山城八幡（本草啓蒙）
10 いとど　京都市、神戸市
11 イトムシ　尾州（本草啓蒙）
12 オカマキリス　尾張中島グ
13 カタリヒ　南部（本草啓蒙）
14 かんなご　三河寶飯グ八幡ム
15 かんなっちょー　靜岡ケ
16 かんのこ　靜岡ケ
17 かんのっこ　〃
18 カンノチョウ　遠江小笠グ千濱ム
19 ギース　岡山ケ川上グ成羽ム
20 きなめ　島原半島口之津
　　肥後松橋マ
21 キナメ　島原半島
22 ギミ　日向西諸縣グ高岳ム
　　さつま谷山マ
23 キメ　種子島西之表マ
24 ギメ　日向小林マ
　　鹿兒島ケ
25 きゅーはち　島原半島北串山
26 キリコ　廣島ケ西條マ

27 きりど　松江市附近
28 キリギッツ　岡山ケ日生マ
29 きりぐす　埼玉ケ入間ケ入四ム
盛岡「御國通辭」
秋田ケ平鹿ケ
山形ケ庄内
武蔵府中邊（物類）
30 キリヨコ　信濃（物類）
31 キレーズ　甲斐南巨摩ケ御富ム
32 くろこーろん　三重ケ尾鷲マ
33 くろつ　南都（物類）
34 クロッチ　仙州（本草啓蒙）
35 くろっち　伊勢度會ケ
36 クロッヽ　埼玉ケ入間ケ金子ム
越中
筑前甘木マ
筑後（本草啓蒙）
筑後（本草啓蒙）
福岡ケ八女ケ下廣川
筑後（本草啓蒙）

37 くろつづ　石見
38 クロツムシ　筑前朝倉ケ三輪ム
筑後（本草啓蒙）
39 クロトチ　東都府天田ケ
40 クロトト　若狭三方ケ
41 くろんぼ　高松市
伊豫周桑ケ
42 けさかつか　宇都宮市
43 ケサノカカー　相州津久井ケ内郷ム
44 ケヅリムシ　尾張（本草啓蒙）
45 ケラ　埼玉ケ入間ケ與富ム
46 けろけろ　越中
47 コイロギ　福井市附近
48 コウコウ　江戸（本草啓蒙）
49 こーろく　島原半島深江
50 こーろぐ　〃　四石家
51 コーロゲ　埼玉ケ入間ケ大井ム
52 こーろめ　常陸新治ケ
53 コロコロ　信州小諸マ

「キリギリス」と「コホロギ」

54 コロ　　知州(本草啓蒙)
55 ころ〳〵し　　南部(物類)
56 コロコロムシ　　津軽
57 コロンボ　　土佐
58 コロンボウ　　土州(本草啓蒙)
59 シュウトンド　　遠江小笠ゲ柯城ム
60 ソバキリゴ　　岡山ケ上島ゲ
61 ちんちくら　　越中
62 ちんちろ　　紀伊日高ゲ
63 ちんちろこ　　日向門川縣ゲ加久藤
64 ちんちろりん　　紀伊日高ゲ
65 つとれさし　　大阪府
66 つどりきせ　　越中
67 テイテイトウシ　　越後高田(物類)
68 トクリヘンジ　　土佐野市
69 トチゲラ　　尾州(本草啓蒙)
70 トンド　　丹後
71 はたおり　　遠江小笠ゲ
72 ヒジリ　　丹後三重ム
73 ヒウトンド　　遠江小笠ゲ相草ム
74 ひよひようぎ　　肥前諫早マ
75 ヒヨロヒヨロ　　長崎市
76 ひょろひょろぎす　　肥前島原マ
77 ヒリンヒリン　　肥前島原半島
78 ヘイジ　　尾州(本草啓蒙)
79 クロギメ　　日向木庄マ

蟋蟀の方言

1 イトゲ　　由城久世ゲ
2 オツチヨチヨ　　近江伊香ゲ
3 カマドキス　　近江大上ゲ
4 カマゴロ　　みの山縣ゲ
5 カンタ　　土田市附近
6 カンタロー　　〃
7 キイツチヨ　　甲斐北都留ゲ
8 キス　　信州下水内ゲ
9 ギス　　〃

「飛州志」

10 キリゴ　石見那賀グ下府ム
11 きりきす　紀州
12 きりす　〃
13 キリゴ　因幡氣高グ豊美ム
14 ギリス　三重ケ三重グ
15 キッチョ　信州下水内グ
16 ギッチョ　信州下水内グ
17 クロッヅ　備阿ケ企救グ
18 クロト　因幡岩井マ
19 けさかっか　茨城ケ
20 ケサガッカ　栃木ケ河内グ古里
21 ケサコッコ　〃　安蘇グ植野
22 ケサハッコ　〃　河内ク篠井
23 コーロゲ　〃　〃　〃
24 コーロン　埼玉ケ北足立グ土合
25 ころころ　能登鳳至グ
　　信州下高井グ優ム
　　千葉ケ夷隅グ

26 ジンチョ　近江栗太グ
27 スイッチョ　〃　〃
28 チミス　〃　〃
29 チンクヲ　越中婦負グ山田ム
30 ちんころ　栃木ケ芳賀郡須賀ム
31 チンチロ　紀州下里マ
32 ツーツー　飛騨吉城グ
33 ツヅリサシ　〃　〃
34 ツンヅリサシ　〃　〃
35 ナデウマ　近江犬上グ
36 ヨキチ　伊勢度會グ

「キリギリス」と「コホロギ」

キリギリスの方言

1 うり　茨城
2 ろりい　水戸(本草啓蒙)
3 ウリス　江州(本草啓蒙)(物類)
4 ガッタ　尾張中島グ
5 カマゴロ　みの山縣グ殿美ム
6 きーす　静岡ケ

7ぎーす　雲州(本草啓蒙)
越中
播磨飾磨ゲ谷外ム
出雲大原ゲ
岡山ゲ阿哲ゲ草間ム
伊豫周桑ゲ
相州津久井ゲ内郷ム
福岡ゲ筑上ゲ東吉富
上總

8キーソチョ
9ボーッチョン
10ききりす
11キス
12きず
13ギス

上田市附近
靜岡ゲ
津輕
山形ゲ蔵賜ゲ
相州國府津
信州南佐久ゲ
豊橋市附近
越前坂井ゲ
京(本草啓蒙)
「浪花問書」

14キッツ
15ギィス
16キッチョ
17ぎっちょ

18ギッチョン

19ギッチョン
20ギッツ

21キリーゾー
22きりきす
23キリギス
24キリギッツ

宇和島市
津輕
三河北設楽ゲ鳳根ム
東國(本草啓蒙)(物類)
相州鎌倉ゲ瀬谷ム
ひたち猿島ゲ
相州三浦ゲ
信州下高井ゲ瑞穂ム
尾張中島ゲ
埼玉ゲ入間ゲ坂戸マ
相州足柄上ゲ
甲斐、石見
銚前粕壁ゲ大川ム
埼玉ゲ入間ゲ坂戸マ
信州南佐久ゲ
相州津久井ゲ内郷ム
常陸多賀ゲ
臘州(本草啓蒙)
埼玉ゲ入間ゲ宗岡ム

25 きりす　石城郡倉マ
相州津久井グ内郷ム
山城久世グ
奈良ケ南都城グ
上総長岡グ
土佐本山マ
江戸(本草啓蒙)
土佐長岡グ
尾張中島グ
26 ギリス
27 ギリチャウ
28 キリス
29 キリッチョ
30 きりんど
31 きんぎりす
32 くだまき
33 げっつ
廣島ケ
大阪府
肥前諫早マ
靜岡ケ

34 げれす　越中
35 こうろぎ　盛岡市(御國通辭)
仙臺(濱萩)
出羽ケ庄内
秋田ケ山利グ
壹岐
播磨飾磨ケ麗塩ム
36 こーろげ
37 ジンキチガシュー
38 すいっちょ
39 ちゃんぎー
40 ちょんぎいす
石見
松江市附近
岡山ケ上房グ
伊豫周桑グ
41 チャンキス
42 とんぎりす
能登羽咋グ
43 やまぎす
伊勢(物類・本草)